

森のふくろうへの独言

柳田国男生誕百五十年頌 参

小田 富 英

届くか

わが無音の独言

聴けるか 翁の再生の詩

翁生まれて百五十

目出度いわけでもなからうが

今ここにいたら何と言う

時々想いをめぐらすのも悪くない

百五十とはそういう数だ

では

無音の詩片でそれが可能か

試してみるのも悪くはなからう

翁の子の「父の遺したことは」は深い

父の学は

人倫の習俗や

人の心意の伝承を語ろうとするに

とかく

野のけものの心にまで分け入っていき

幼な子の心持ちで

父自身が楽しんでいたと

山からの帰り路

腹から湯気を出して命落としている鹿の

この皮欲しけれども

御犬さまがどこかで見ているから

取ってはならぬと語った爺の言葉は

翁にとっては謎の言葉

それは爺の想像か

それとも狩人の経験による正しい知恵かと

疑問から湧いた仮説をこの目で確かめるため

翁の可愛らしさは

モリと名づけた秋田犬の観察と実験に続く

モリが獲ってきた子供の靴や一切れのパンを

モリの視線を追って自説の行方と重ねる

翁の子の

父は少し早く生まれすぎたという一言は
百五十年を飛び越えた翁の学の再生の予言でもある



角

神誌

第68号